



1984年(昭和59年)
5月号(No.467)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 被雷を防ぐための規制措置を！……(1)
カンチエンジュンガ登山隊からの
便り……(1)
落雷はどの程度予知できるか……(3)
パークス公使立山登山のこと……(4)
海外の山……(6)
ナンド・デビイ入山禁止、「ディ・
アルペン」編集長からの手紙
第21回『この一本展』より(1)……(5)
「あしなか」「白馬嶽」「黒部峡谷」
「霊山に攀る」「Snow Structure and
Ski Fields」「Naar Hymalaya en
Karakorum」「日本山水大観」
追悼……(8)
図書紹介……(9)
「立山の平蔵三代」「岳人事典」
「世界—人工衛星写真集」「わが
出逢いの山々」「立教大学山岳部報」
東西南北……(9)
会務報告・ルーム日誌・会員移動……(10)
ネパール・ヒマラヤ登山許可峰……(12)
図書受入報告・会員移動……(15)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話

234 六六五九

被雷を防ぐための

規制措置を！

松田 雄一

落雷について毎年何件かの痛ましいニュースを耳にしており、昨年も六月十九日に秋田駒ヶ岳の横岳付近で(一五八三メートル)落雷があり、岩手県金崎町の町民登山の一行百六名が被雷し、十三名が負傷(うち一人は重傷)する事故があった。何とかこのような事故を回避する具体的対策はたてられないものだろうかとか常々考えていた。

「山」四六〇号に中村純二氏が、科学研究委員会第十八回講演会において、埼玉大教授の北川信一郎氏が講演された要旨を紹介されており、大変興味深く読ませて戴いた。日本山岳会がこのような研究会をもつことは大変意義のあることである。私は日本の山では直接

雷の恐怖にさらされたことがなかったもので、ヒマラヤにでかけるまでは切実な感じをもっていないかったが、一九五九年に本会のヒマラチュリ登山隊に参加して、ヒマラチュリ東尾根の前衛峰の肩に設けた第三キャンプでは帯電した雲の中で雷と同居する恐怖の一夜をすごしたり、前衛峰の氷壁の途中にあるチムニーの中でビヴァークした夜は、稲妻が青白く、真近の氷壁にピカッと走るのを体験して、それ以来、すっかり雷の恐しさを認識させられ、関心をもつようになった。

その時のヒマラチュリ東尾根取付点にある部落名をNanunuiといったが、シエルパの解説によるとこれはチベット語のナムドゥ、即

カンチエンジュンガ

登山隊からの便り

・カンチ通信 No. 1 (2月20日)

日本ではまだ寒さの厳しい日が続いているようですが、皆様にはお変わりなくお過ごしのこととします。カトマンズは日中は日本の初夏の気候でまことに快適です。出発まで何かとお世話になりましたことを改めて御礼申し上げます。

NJKEは一月二十六日、佐々木以下の先発隊四名が、二月五日に鹿野以下の中発隊六名が、すでにカトマンズ入りをして準備をすすめて参りましたが、二月十九日、重広以下十五名の本隊がカトマンズに入り、あとは後発七名を待つのとみなりました。

現地では磯野ら六名がすでにビラトナガルに入って隊荷の通関を大部分終えており、十九日には、第一キャラバンの中尾、小林(春)、サーダー・ハクバ・テンジン以下ハイポ

ーター十八名が、ダーランパザールを三百七十名のポーターとともに出発しました。第二隊は

おります。全員いたって元気です。どうか安心下さい。これまでのところほぼ順調に計画は進んでおりますが、まだ動きだしたばかりで、今後については予断を許しません。あくまで慎重に行動するつもりであります。

JACとしてはネパールでは久しぶりの大きな隊でもあり、観光省もいたって好意的であり、ヒマラヤン・ジャーニーはじめ各方面に協力をいただけてきました。ネパール各方面とのよい関係もできる限り保ってゆきたいと思っております。カトマンズ出発の前夜 (鹿野勝彦)

・カンチ通信 No. 2 (2月25日)

十九日にネパールへ着いた本隊は慌しく二十一日ビラトナガルへ移動し、二十二日タプレジュンへ飛びました。従来のカンチ登山隊にとって、ここはほぼキャラバンの中間にあたりますので、まことに効率的になったといえましょう。

輸送隊の第一キャラバンはすでに十九日、ヒレ

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

ち雷がなまったものだそうで、(ネパール語ではそのものずばり「ガラングルン」＝日本語のゴロゴロに相当という由)ナムルー村はさしずめ雷電村とでもいうのだろう。ネパールでもこのような名前のつくところには雷の名所があるとのことであった。そういえばマナスルでも、エベレストでも、近くで雷にあった記憶がないので、ヒマラヤでも地形的に雷の発生しやすい場所、落雷しやすい場所があるのだろうと漠然と考えるようになった。事実、ヒマルチュリ東尾根に向かった明大隊などほかの隊も、このグラニット(花崗岩)で形成されているヒマルチュリで雷を経験していることもわかった。

そう思っただけで日本の山を眺めてみると、地形的にみて雷の通り路はたしかにあるし、落雷しやすい要注意の場所もあるような気がする。記録を調べてみると、北岳山頂や槍ヶ岳山頂のように尖ったピークでは落雷事故が多く、また地名に雷のついている雷電山(山頂や中腹に雷観音とか雷神の神をまつる雷神社があるためにこのような名前のついている山もある)とか雷岩のようなところにも危ないところが多いことがわかった。

昨年八月十九日付の新聞で、フランス南部のツールーズ地区では電話線に落雷があり、通話中の二人が死亡する事故があったことを

報じていたが、調査の結果によれば、この地方は花崗岩帯で、花崗岩が良導体のため、この種の事故がおこりやすいことが判明したとも報じていた。

追加訂正

会報46号掲載のカンチ登山隊員のうち、左記隊員が欠落してしましたので追加訂正して下さい。

梶 正彦(36) (マナージャー)、三辺夏雄(40) (同)、松沢哲郎(33) (学術)、小原俊(37) (会計)、小林政志(34) (食糧)、和田城志(34) (装備)、佐々木慶正(28) (装備)、藤原一孝(28) (輸送)、小林春好(25) (装備)、大谷亮(24) (食糧)、広川健太郎(23) (燃料)、尾崎 隆(32) (装備)。

この記事を見て、良導体である花崗岩の山では落雷が多いようにも思ったが、前記北川教授のお話では、山の岩質はあまり関係なく、周囲に抜き出て尖ったところがあれば、とにかく危険であるとのことであった。

かつて白馬山麓で夕立にあい、大きな樹の下で雨宿りをしていたところ、その樹に落雷があり、失神して九死に一生を得たという竹

をスタート、明二十六日に本隊と合流します。また第二キャラバンも遅れていたプロパンガスの通関を終え、三日間隔で第一キャラバンを追っています。全員元気で、輸送も予定通り順調に進んでいます。

タブレジュン空港付近からはカンチの七千メートル以上がほぼ正面に余すところなく見えます。ほかの山が雲一つないときも、ここだけは雲を頂稜からたなびかせ、まことに圧倒的です。今年のネパールはどちらかといえば降水の少ない冬だったようですが、春の降雪はこれから三月中旬にかけてのなかで楽観はできません。これより数日で氷河へ入って行くことになり、すので、気をひきしめて行動したいと思っています。(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No. 3 (3月8日)

私たちもいよいよカンチエンジュンガを目の前に見るヤルン氷河へ入って参りました。ここラムゼーの先より仰ぐカンチは誠に圧倒的で身のひきしまる思いがいたします。快晴のときもカンチ上部だけは北西からの風に白い雲を相変らずたなびかせ、春未だしの感をうけます。

さて今シーズンのキャラバンは天候に恵まれ、また先発隊員やサード、シエルパの活躍もあって、現在のところかなり順調に進んでおります。隊員たちのコンディションも上々です。

第一キャラバン隊とタブレジュン空港で合流した本隊は、二月二十日、最奥の村ヤンポディンに着き、ポーターの大半を交換してから、三月三日に三百四十人がかつぐ荷とともに標高三八〇〇メートルのツェラムへ入りました。

ここで隊を二分し、重広以下の偵察隊はラムゼー、グレイシャーキャンプ、コーナーキャンプを

経て七日、BC地点を確認し、鹿野以下はツェラムを起点に高所順化を行ないつつ順次ラムゼー、グレイシャーキャンプへ荷上管理として上がっています。ラムゼー以上の荷上げは主としてカトマンズより連れてきた約百人のポーターによっており、BCへの第一回荷上げは三月十三日ころになる見込みです。

第二キャラバン隊は第一隊のあとだけにポーター集めに苦労し、九日ツェラムに入り、十日以後、高所順化を続けながら第一隊を追う予定です。平野以下の第三隊はさらに若干おくれています。いずれにせよBC建設は三月十五日前後となり、三月後半より本格的な登山活動を開始できる見込みです。今後とも慎重に行動を続けたいと思っています。(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No. 4 (3月17日)

日本ではそろそろ桜の便りのきかれる季節になったかと思えます。カンチの氷河上も少しずつ、しかし確実に春にむかっているようです。

BCへの輸送も三月中旬に入って最終段階を迎え、三月十四日、予定通りヤルン氷河右岸の標高五三五〇メートル地点にBCを設置して、重広以下の先頭グループが入りました。すでに何度もお報せしたように、好天に恵まれて予想以上にキャラバンが順調に進んだ結果ですが、ラムゼーグレイシャーキャンプコーナーキャンプBCという氷河上の輸送は現在も続いており、最終的にすべてのメンバー、隊荷がBCに集結するのは三月三十日ころとなる見込みです。

ベースより上への偵察、ルート工作もBC設置の翌十五日よりすでに開始しており、一両日中に標高六一〇〇メートル付近の第一キャンプ予定地までルートがのびるかと思えます。

節作太氏からはよく雷の恐しさについて聞かされ、雷岩と名のつくような岩の下では絶対に雨宿りしないようにと注意をうけたことを覚えていた。日本人としてはじめてオスロのホルメンコーレンのオリンピック・シャンツェを飛んだほどの、こわさ知らずの竹節氏も雷がなるとすっかりおとなしくなってしまうのである。

また、かつて(54・8・6)槍ヶ岳の山頂で落雷事故に遭遇したこのある会員、庄定人氏からは、次のような体験談を聞かせてもらった。

「槍ヶ岳の山頂についていたのが十五時少し前だったと思う。頂上は狭く、下り待っている人が二十人ほどならんでいた。一人ずつ登ってくるので下れずにガスの中で寒そうにしている子供や女性もいた。このままでは、頂上は人で立てなくなる。そう思っている岩の上に立って、上がってくる人を止めて下る人をおろし、上げたり下ろし

科学研究委員会

落雷はどの程度

予知できるか

―槍ヶ岳山頂における落雷の危険性―

北川信一郎(埼玉大学工学部教授)

落雷を予知して、人身事故を防ぎたいというのは、日本山岳会の松田雄一氏をはじめ、屋外スポーツにたずさわるすべての人の関心事でしょう。しかし今日の気象学と雷研究の成果では次のよう

にしか答えられません。「雷雨予報はかなり正確

たりして交通整理をした。登ってくる人もなくなつたし、また、寒くなつてもきたので、岩を越えて下りかけたその時、雨になった。ああ雷雨だと思ったが、雷らしい様子は感じなかった。そう思つて一分も下らないとき、**「パチッ」**と頂上で音がした。落雷だと思つて上を見ると、頂上から人が落ちてきた。死者二名、重傷者三名という惨事が一瞬のうちに発生した。

自分が交通整理をして待たせたため、山頂で落雷事故にあった人もいた。しかし、交通整理をしなかったならば、もっと多くの人がやられていたのも事実である。いくらそう考えてみても何ともあとも味の悪い事故であり、その夜はついに一睡もできなかった。」

長野県警察本部がまとめた「ケルン―山岳遭難十五年のまとめ」によれば、昭和二十九年から十五年間の長野県下における夏山事故発生件数五六二件のうち、落雷に

りまでの順化をほぼ順調に終えており、今後、次つぎとBC入りしますので、先頭グループは四月初めには、いったんラムゼー付近まで休養にあり、後半に備えたいものと考えております。いよいよ本格的な登攀活動に入りますので、今まで以上に気をひきしめて慎重に行動するつもりです。

(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No. 5 (3月25日)

BCはすでに三月十四日ヤルン氷河右岸の丘の上、標高五五〇メートルに事実上設置して、十五日以降、CIへのルート作業を開始しておりますが、十八日に私とサードがBC入りし、ネパール、日本国旗とJAC会旗を掲げて登山の安全祈願を兼ねたベースキャンプ開きをいたしました。

十九日からは通称ハンパ稜上の標高六一五〇メートル地点のCI予定地に荷上げを開始し、二十日にCIを設置して重広、和田、三谷ほかシエルパ三名がCI入りいたしました。ここまでは大半

よる事故は九件と発生件数は少ないものの、死亡者は百八十一名のうち十三名もあり、死亡事故者のうちで落雷事故によるものの率は

になりました。しかし今日の気象観測システムと気象統計データから、落雷の地点と時刻を正確に予知することは、不可能です。平地の場合、放電活動をおこしている雷雲の直下、直径一〇キロくらいの範囲はすべて同程度の落雷の可能性があると考える必要はなりません。

これは雷と雷雨の観測結果にもとづいた間違いない話ですが、これではあまりにもせっけない話ですから、もう少し観測や統計の結果にもとづいた落雷の確率を考えて見ましょう。

が水で、部分的には五〇度近い傾斜をもつていますが、比較的安全で確実なルートとなりました。二十一日からはヤルン氷河に入り、二十四日には標高六六〇メートルのCII予定地への荷上げが始まって、二十五日にはCIIが建設されました。今後、上部での登攀の基地となるCIII(前進ベースキャンプ)予定地、グレートシエルフ(標高七三〇〇メートル)へのルート作業がここから継続される予定です。

一方おかれていた後発隊もようやく本隊の後尾に追いつき、標高三八〇〇から四四〇〇メートルのツエラム、ラムゼー付近で高所順化に入りました。

二十三日にはラムゼーで只野によるハンググライダーの第一回テストフライトも行なわれ、隊員、シエルパによる組立訓練が進んでいます。順化のおくれている二、三名を除いて隊員のコンディションも上々ですからどうかご安心下さい。(鹿野勝彦)

八・三%と極めて高い。

また、このたび長野県警察本部外勤課の水田廣氏(本会会員)から提供して戴いた資料によると、昭和二十九年―五十九年の過去三十年間に発生した落雷事故の件数は二十一件で、件数は少ないものの、遭難者の数は七十六名(死亡十九、負傷五十三、無事救出四)とかかなりの数字になっている。

しかもこの数字は、長野県警に

届け出があつたもののみなので、実際にはこのほかに未届け、自己処理済のものがかなりあると推定される。

このような落雷事故は、何とか予知して回避できないものなのだろうか。

北川教授は、「人体への落雷安全対策と緊急避雷法」について貴重なアドバイスをされており、大変参考になる。この上は、具体的

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

気象統計によると東京市部を中心とする関東平野では、雷雨が観測される日数は一年間に平均一五日です。この程度の雷雨発生率ですと、一年間一平方キロあたりの落雷回数(落雷確率)は一といふ統計が出ています。栃木、群馬、長野、岐阜県などの山岳部では年間の雷雨日数はもっと多く三〇〜三五日で関東平野部の二・二・三倍です。それでは一年一平方キロあたりの落雷回数は二・二・三かという山岳地帯ではこのような単純計算が成立たなくなります。

空気は、普通ではたいへん良い絶縁体で、電気を通しません。落雷は雲の中に出来た電気が、空気の絶縁を破壊して、瞬間的に大地に流れ込む現象で、大変スケールの大きい空気の絶縁破壊現象です。破壊は物質の一番弱いところでおきますが、雲と大地の間の空気の絶縁は大地が上方につき出ているところをもっとも弱く、こわれ易くなっています。上方につき出るものは、土でも岩でも、一本杉でも、人体でも、釣竿でも、避雷針付の高層ビルでも、すべて同じように空気の絶縁をこわれやすくする作用があり、この作用は物体の電気抵抗によらず、物体がどのように大気中に突き出ているかという幾何学的形状でまゝです。したがって落雷確率は、年間の雷雨日に比例すると同時に、地物が大気中に突出する形状にも左右されます。山の場合は海拔何メートルか、ということではなく、周囲の地形に対してどれだけ大気中に鋭く突き出ているかによってまゝ、落雷の確率は、山頂、特に尖ったピークが最も高く、尾根、鞍部、山腹、谷間という順で低くなりますが、広い盆地の真中は平地と変わらないことになりま

北アルプスの事情に詳しい人達は、槍ヶ岳の山頂には毎夏一回以上の落雷があることを認めています。正確な年間落雷数を計上すれば、もっと高い数値になると推定されますが、ここでは年平均の落雷回数を一として平地の場合と比較して見ましょう。

気象統計によるとこの地域では年間の雷雨の発生する日数は三五日です。この雷雨日数ですと、平地では一平方キロ、年間二・三回の落雷がおきるという確率になります。槍ヶ岳山頂の面積は二〇平方メートルで、一平方キロの五万分の一です。平地ならばこの面積への年間落雷確率は、二・三の五万分の一、すなわち一〇万分の四・六というたいへん小さい値です。ところが、現実の槍ヶ岳山頂では、この二〇平方メートルに、年間一回の割合で落雷がおきていますから、年間落雷確率は一で、何と平地の値の二・二万倍になっています。これは槍ヶ岳があのように大きいスケールで鋭く大空に突き出ている結果にほかなりません。

一平方キロへの年間落雷確率が一である関東平野では、警察庁の調査結果によると、毎夏一回以上の落雷死亡事故がおきています。したがって、雷雲が近づいているときの、あるいは、雷雨予報が出ているときの槍ヶ岳山頂の危険率はたいへん高いものであることが予想されます。

適確な落雷予知はできませんが、この統計結果から、肩の小屋で登頂をストップする措置は是非必要と思われます。雷鳴が聞えるのは一〇キロ程度ですから、遠雷が聞えたら、あるいは雷雨予報がでていたら、登頂を見合わせるのが、生命尊重の科学的手段です。

に地形、地名、過去のデータなどから落雷危険箇所を探し出し、これらの場所では「雷注意報」等を

も参考にして、落雷回避についての具体的な対策を検討しておく必要があると思う。たとえば、槍ヶ岳

山頂であれば、肩の小屋あたりで落雷を予知した場合には、一時、登頂をストップさせるなど(噴火

のおそれのある火山でとられていくように)何らかの規制措置がとられないものだろうか。

平地では山地で生産された雷が雲とともに移動してくるわけ、自分のところにくるまでの間には時間もあり、心構えもできる。しかし、山では、雷の生産地であるから、いきなり予告なしにくることがある。そこでこのように

―登山史メモ①―

パークス公使立山登山のこと

山崎 安治

駐日英国公使サー・ハリー・パークスが通訳官のアーネスト・サトウとともに一八七八年(明治十一年)七月、針ノ木峠を越えて立山に登山したということは、会報一八三三(昭和三十一年一月発行)の「英国公使の立山登山」という記事で私はそのまゝ鵜のみにしていたのだが、これは誤りであることが、このほど東洋文庫から出たF・V・ディキンズ、高梨健吉訳『パークス伝・日本駐在の日々』を読んで明らかになった。

会報の記事の筆者は吉阪俊蔵氏で、戦前内務省で国際労働機関(ILO)設立に尽力した政府の高官、戦前の岩波新書、チェムバレン『鼠はまだ生きてゐる』の訳者であった。私が会報を編集していた当時、隆正氏からこういう原稿

雷で危険な場所は、小さな雷が一発なつたら危ないと思わなくてはいけない。

雷の被害を防ぐための規制措置の実施は極めて難しい問題であるとは思われるが、短時間で済む問題でもあるし、出来ないものだろうか。会員各位のご意見をお伺いしたい。

があるがといわれて受取り、そのまま会報に掲載したのであった。俊蔵氏の記事は、神田の古本屋でパークスの伝記を入手し、読んだところサトウをつれて立山に登ったことが出ていたので、珍しいと思い一部を翻訳したとなっている。パークスの伝記というのは、Dickens『The Life of Sir Harry Parks』で、この本は俊蔵氏の没後にも吉阪家にあるというので、私は隆正氏に一度、見せてもらいたいとお願ひしたまま、隆正氏も四年前に亡くなられてしまった。アーネスト・サトウの立山登山については、ロンドンに所蔵されているサトウの自筆日記の原本から富山県が翻訳許可を受け、原文は『富山県史 史料編VI近代・上』(昭和五十三年十月刊)に収めら

れ、この全文の訳は『富山県史』より3(昭和五十二年十月発行)に『英国公使館書記アーネスト・サトウの立山登山日記』アーネスト・サトウの日記より」と題し福沢都茂子氏訳で発表された。この二つはともに富山県立図書館長広瀬誠氏のご好意により私のところにコピーのご送付を受けたものだが、この登山日記によると、パークス公使は登場してこない。サトウの同行者は退役英国海軍士官A・G・S・ハウスで、明治十一年七月二十三日、野口を出発、針ノ木峠を越え、黒部川平ノ小屋泊り。二十四日、スキイ谷、ザラ峠を越え立山温泉泊り、二十五日は悪天候の中を松尾峠から室堂に至り、地獄谷を見物、二十六日も雨なので立山登山を断念し、ブナ平、材木坂から芦峠に下山している。芦峠には数年前ガウランドがデイルンとともにきたことがあると記されているが、パークスのことは何も述べられていない。

吉阪俊蔵氏の『英国公使の立山登山』はまた昭和三十年十月二十三日付の北日本新聞にも載せられており、(広瀬誠編『立山、黒部文獻目録』による)高瀬重雄氏の著作『古代山岳信仰の史的考察』にも引用され、さらに同氏の『立山信仰の歴史と文化』の「近代登山と立山」の章にもパークスがサトウとともに登ったと述べられ、また同時に福沢都茂子氏の訳も引用されている。

用されている。

永年の疑問は東洋文庫の『パークス伝』(昭和五十九年一月、平凡社刊)の第十四章「進歩する日本」を一読して氷解した。パークスがサトウとともに立山へ登ったのではなく、サトウが明治十一年七月二十七日付で、芦峠からこの登山についてパークス公使へ送った報告なのであった。「E・M・サトウより、立山の麓芦峠、七月二十七日」というのがその書き出しである。高梨訳は針ノ木が榛木になっていた、芦峠が足倉となっていたりして吉阪俊蔵訳のほう

が読みやすいが、ちょっととした思ひ違いから前文に吉阪氏はパークスもサトウと同行したと書かれてしまったのである。それにしてもこの話をさかんに一杯やれた隆正氏の死が惜しまれる。

なおこの『パークス伝』によってパークス夫人の名前はファニーであることがわかった。パークス公使夫妻は一八八六年(慶応二年)富士山に登っており、パークス夫人は女性による最初の富士登山者といわれているが、これについてはまたの機会にゆずらう。

第二十一回

『この一本展』より(1)

第21回『この一本展』が、二月二十五日(土)、ルームで開催されました。慣例により解説原稿を順次掲載し、参考供します。また、今回は、併催の『山岳図書を語る集い』の講師、岩科小一郎氏の著作六冊(『山岳語彙』『山麓滞在』『大菩薩連嶺』『山の民俗』『山村滞在』『富士講の歴史』)を、会員、岩瀬皓祐氏の協力により「特別展示」として、あわせて展示致しました。貴重な愛蔵書をご出品戴いた各位に厚くお礼申し上げます。

図書委員会

一、あしなか

第拾貳輯

羽賀正太郎編

昭和二十四年五月

山村民俗の会発行

「あしなか」は山人や山村の民俗、歴史、地理などを調査研究す

る団体「山村民俗の会」の会誌である。会の創立は昭和十三年で会誌は翌十四年二月に第壹輯が発行されている。初期の頃は不定期刊行だったらしく戦前は第六輯までの六冊だけであった。戦後、第七輯から刊行が始まりその後、隔月刊となって現在も続いて出ている。この会誌には時どき特集号が

編まれるが、たいへん内容の充実したものも多く、例えば「狩の話(第拾五輯「雨乞」(四十輯)「本邦外来登山具史」(四十三輯)などは読み物としても楽しい。毎号、表紙図案の異なるのもこの会誌の特徴で、手にする楽しみ一つとなっている。

この第拾貳輯は、昭和十九年五月に死去した前会長木暮理太郎の六周忌記念特輯号である。追慕の執筆者は岩科小一郎、羽賀正太郎、川崎隆章、敬愛生の各氏で、それぞれに木暮理太郎の人となりや想い出を、エピソードをまじえて書いている。そのなかに木暮理太郎の葬儀には参列した人が三十名くらいであったとあるが、日本の登山界に偉大な足跡を残した人のものとしてはいかにも寂しく、暗澹たる気持ちにさせられる。個人の心や生活や喜びなど全て簡単に押しつぶされてしまう時代であった。表紙の登山姿と中の特輯ページの肖像は茨木猪之吉描く木暮理太郎像から複写したものである。

岩瀬皓祐

二、白馬嶽

北安曇郡教育会

編輯兼発行

大正二年九月

三、黒部峡谷

富山県下新川郡教育会

編輯兼発行

大正五年三月

この二冊の案内書は、ともにそれぞれ地元(北安曇郡教育会から出版されたもので、非売本であるところをみると一般に広く頒布されたものではないようだ。ちょうどこの頃には色々の山の観光案内、名勝地紹介の案内書が各地から出ているのであるが、それらとは出版目的が若干違ふようである。ただこれらの本の最初に、教育会がこの山城の研究、景勝地紹介を事業の一つとして発行したとことわっているところを見ると、この時代には役所の観光課のような仕事を教育会で受持っていたのかもしれない。「白馬嶽」は白馬の地理的概説、登路案内、高山植物目録、山崎直方の「白馬岳の雪」、河野齡蔵の明治三十一年八月の「登山記」の再録からなる。編集は百瀬慎太郎、装丁は茨木猪之吉である。

「黒部峡谷」は黒部川水系の説明に始まり、温泉の紹介、峡谷探勝、黒部より白馬、唐松、五竜、剣、立山各山への登路などで、著者は吉沢庄作である。装丁には特別ふれていないが「白馬嶽」と大変良く似ているのでやはり茨木猪之吉と思われる。以上二冊とも内容は形通りの案内書で、これといつてめずらしいものではない。ただ意外と思われるかもしれないが、大正時代までの山岳書で、白馬とか黒部という名前をつけた本

は少ないのである。特に黒部に關する本はこれ以前には明治四十三
年刊、井上江花(忠雄)の「黒部
山探検」があるだけである。

岩瀬皓祐

四、靈山に攀る

ケナード著

昭和九年六月発行
東京・教文館

この本の「序」(昭和九年六月一日)の中に「今から八年前秩父宮殿下御外遊の節、恰度瑞西のアルプスに御登攀遊ばされました。畏れ多くも、私はその御一行に加えられまして瑞西アルプス中最も危険なところを征服いたしました。」「挿絵をごらん下さい。秩父宮殿下の御一行は今や一と休みをしようとして宮殿下を中心に一所に集ってゐます。中央向ふを御向き遊ばすが宮殿下で、笑ひながら宮殿下のお話お相手申しつけられるのが、この著者であります。」など見える。

この著者は昭和三年から六年まで日本山岳会の会員で、会員番号は一〇九二、当時、水戸市に住んでおられたらしい。「この八年間、日本の山々を登攀してをります。」「ともあるように本文には富士山、燕岳、浅間山、穂高山などが出てくる。

日本の山々を登ったウォールストンやシュタインニッツァーなどは

母国語で、それぞれ本をあらわしているが、このケナードさんの本はすべて日本語文である。文章は正しいものであるが「雪橋(ゆきばし)」「大裂目(おほわれめ)」「十本の針(スパイク)のついた歩行靴」などの名詞は氣にかかる。写真版十三点、本文ルビ付、四六版、八七頁、定価三十五銭。内表紙に「日、仏、瑞、アルプイン倶楽部部員文学博士、哲学博士、ジェイ・エス・ケナード著」とあり、題名の「靈山に攀る」の「攀る」は本文の用語のルビによれば「よちのぼる」と付されているので「れいざんによじのぼる」と読ませるのであらう。小野 幸

五、「Snow Structure and Ski Fields」

by G. Seligman.

R & R Clark 1962 Reprint.

一九三六年発行の本書の原典は、その道の人たちにとっては余りにも有名な雪崩の専門書で、いまさらご紹介するまでもないと思ひます。これはそのリプリント版なのです。

本書は発行後、速やかに絶版となり、日本にもたらされた部数は極めて少ないものと思われま

す。私もたびたびロンドンの古本屋に注文してみましたが、ついに入手できませんでした。このたびこうした要望にこたえて、表紙裏の案

海外の山

ナンダ・デビイ入山禁止

インドのナンダ・デビイ山城の国立公園法設置にともなう入山禁止のニュースは、昨年来すでに伝えられているが、これは、最近激増する登山者、トレッカー、および地元民の牧羊者による放牧の被害が「生態学上からも極めて危険な状態にある」ので、その対策上からした措置であることがIMF機関誌で明らかにされ、環境汚染問題も遂にこのSANCTUARYにまで及んだとの感を深くさせられる。

この問題を深刻に受け止めているインド政府環境庁、林野庁、ウッタール・プラディシュ州庁、学識経験者らの合同会議が昨年二月十八日、ルクノウで持たれ、NANDA DEVIとVALLEY OF FLOWERSの両国立公園環境保全問題について討議された。ナンダ・デビイだけでも年間二、三十隊の入山があり、空缶、ポリ袋、コンテナなどの廃棄物の山積、木材の切り出しが激しく、また、こうした奥地へのルート開拓により、ここ一、二年の特色として、地元牧羊者の放牧が顕著となり、生物、植物が「枯渴の危機に傾いている」という。

同会議は、リシガンガ流域を含むナンダ・デビイの全面的入山禁止を打ち出し、禁止区域との境界線上のピークは、リシガンガ流域外側からのアプローチで登頂が許されることになった。また地元牧羊者には、放牧地の代替地が別に用意され、

ポーター稼業、牧草、燃料用木材切り出しにたずさわる者にも転職が考慮されているという。

一八三〇年、当時ガルワル州コミッシヨナーのG・W・トレイルが「トレイル・パス」を通じて、この探検史が幕明けたのだが、五十三年で終幕したことになる。この間、一八五五年のA・シュラギントワイト、六一年のE・スマイス、八三年のT・S・ケネディー、少しさがつて一九四一年のS・S・ケラの先蹤者らがあげられるが、リシ溪谷からナンダ・デビイ西面に出たのは一八八三年のW・W・グラハム。またナンダ・デビイ東峰の北東稜下部のパチフ氷河の探査に踏み込んだのは一九〇五年のT・G・ロングスタッフ。このときはナンダ・コットの登頂に失敗したが、二年後の一九〇七年、再度入山してトリスリの初登頂に成功した。続いて一九二六年、H・ラトレッジ、H・サマベルの名が連なるが、一九三四年訪れたE・シフトン、B・ティルマンの登場は、ナンダ・デビイ探検史に結末をつけ、三六年同西峰の初登頂となる。

この山城には四十六座が数えられる。このうち日本隊が初登頂したのが、一九三六年の立教大隊のナンダ・コット(六八六一メートル)を皮切りに、バムチュ(六三〇三)、カラシカ(六九三二)、リシ・パハラ(六九九二)、サフ・ミナル(六九一一)、ナンダ・グンテ東峰(六一〇〇)、ボワリ・トワル(六六六三)、トリスリのピーク21650(フィート)峰の八座。この間、一九七六年J・A・Cの東西ナンダ・デビイ初縦走もあり、西峰の登頂はティルマン、オデールの初登以来、五登目であった。(片山全平)

「ディ・アルペン」

編集長からの手紙

スイス山岳会機関誌「ディ・アルペン」の編集長、エティエネ・グロース氏からの手紙を次に掲げます。この手紙は会報「山」467号でお知らせし

内状が示すように、原著者がみずからベルギーに注文して複製し、希望者だけに配布したものです。印刷は見事に仕上がっております。 金坂一郎

by "Naar Himalaya en Kara-Korum"

by Ph. C. Visser.
Rotterdam. 1923

東部カラコルムのさらに東端に位置するサセル・カンリ(七七七二、または七七〇五メートル)は、一九七三年にインド隊の初登を許したとはいえ、なお未踏の七〇〇〇メートルの高峰三座を含む山群である。日本人未見のこの山城への試みも近年実現しそうな情勢である。

本書はオランダのカラコルム探險家(外交官)フィッサー夫妻による最初のカラコルム行の記録。スプラ川流域とサセル・カンリ山群をカバーするこの本はオランダ語というハンデのせいか、従来その内要は殆ど紹介されぬまま今日に到っている。深田さんも『ヒマラヤの高峰』の中で「フィッサー博士夫妻がやはり同じ谷を登って、測量し地図を作ったが、その時、ロングスタッフの薪の置場を見つけた」としか記していない。リモ山群への日本隊の登山許可が実現した今日、フィッサー隊の記録の実質が検討されてしかるべき

であろう。

本書の一番の見どころは、サセル・カンリ山群のパノラマ写真の鮮明なものが何葉も入っていることである。私の所有本の所持者は、d'Aumerieという人だが(同氏の書票帳付)、余程のヒマラヤ好きとみえ、パノラマ写真へ鉛筆書きで山座同定を試みている。なお、深田さんのいう地図は本書にはなく、「オランダ地学協会誌」(一九二四年)に「サセル・カンリ山群」と題する詳細な測量地図(十万分の一)が帖付されている。

フィッサー博士の五種の紀行はそれぞれ立派な本であるが、それほど多くわが国に招来されたとは思われない。幸いにして、わが羯師山房にはその全てを納めることができた。 雁部貞夫

七、「太陽 第二十九卷 第八号増刊号 日本山水大観」

大正十二年六月
博文館発行
定価一円五十銭 送費六銭

桂月、井泉水、牧水、夕暮、酔茗、花袋、晚霞、その他、旅行や登山を好む多くの文士や画家が、日本の風光のすぐれた地について執筆し、当時の領土、朝鮮、台湾、樺太に及んでいる。中に「登山国民としての山に對

たラインホルト・メスナーに対する判決が十年も前に出ているため、現在はどうなのか尋ねた手紙に対する返事です。なおこれに同封されてきたドイツの山岳雑誌「DIE BERGWELT」の記事については次回にお知らせします。(編集)

*

ラインホルト・メスナーの「実際の」人柄についてお尋ねの手紙をありがたく受け取りました。まず最初に、特にお断りしておきたいことは、私はラインホルト・メスナーと個人的に知り合いではないということです。そのため、彼の性格についての私の判断は、やむを得ず、彼の本、報告書、それに彼の講演から受けた私の主観的印象によっています。

ベルンで行なわれた彼の講演(SAC月報、八二年一月号参照「山」41号に掲載)について私がすでに論評しているように、彼の話は大衆向けをねらったやり方でしたので「それは、商売上手な」ともいえますが「私は一種の不信感をいだいたのです。この確信は、時とともにますます確かなものとなっています。

それにもかかわらずメスナーは、現在、ドイツ語圏においてもっとも名の知れた登山家で、彼はまたそのことを、自分の利益になるよううまく利用することを知っています(書籍、講演、テレビ、南チロルの登山学校など)。

もはや彼は、一少なくともスイス国内でとりわけ現役のアルピニストやそのOBの間で彼の特質としていた模範性を、少なからず失ってしまったのは確かです。それでもなお、その強大な作用はこれらグループにも及び、登山についても、彼は遠隔の地、冒険、それに「汚れなき自然」と結びついた生活を熱望する、といったことで同じ作用を及ぼしています。環境保護を力説し、いつも彼が前面に押し出している「人工的補助手段」の

放棄を力説することにより、彼は、自分を人間が真から欲求している「より良い」生き方をする代表にすることを可能にしました。彼が極東の精神世界へ旅したこと(日本訪問)や、彼の(見せかけの)哲学的発言は、まさにこの図式にびつたりです。なぜなら、これらは今のヨーロッパの思潮に合ったことだからです。

ですが私は、今も、ラインホルト・メスナーが、日本でどのような話をしたのかということに(ヘルリッヒコフファーについて?)興味を持っています。

ご返事を期待しながらペンを置きます。

なお例証として、ユーモラスに書かれた、

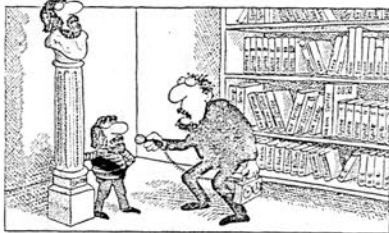
「Fairmeans M. Spitze」氏との架空対談の記事を送ります(メスナーのMを使い、彼を公正な手段を使う先鋭的アルピニストとして、これをもじってつけた架空名です)。これはドイツの山岳雑誌「F」氏からかわれ、彼の言っていることが無条件で受け容れられないことを示しています。

ディ・アルベン編集

E・グロース

Fairmeans M. Spitze

Rekordalpinist



ZEHRING TIRET

追悼

名誉会員

成瀬岩雄氏

(会員番号八六五)

本会名誉会員成瀬岩雄氏は、藤沢市の藤沢市民病院にて入院加療中のところ、三月二十一日、午後四時三十分、肺炎のため逝去されました。享年七十八歳。

同氏は明治三十八年(一九〇五年)東京に生れ、成蹊中学校、成蹊高等学校を経て、昭和七年三月東北帝国大学経済学部卒業。

大正時代から山に親しみ、大正十五年三月には、抜戸、笠ヶ岳、南岳に登頂。大島亮吉氏のパートナーとして上州の武尊山や、秩父の瑞牆山にも登っている。

本会には大正十二年十一月入会、会員番号八六五、多年理事、評議員を歴任、昭和四十六年以降二年間、三田幸夫会長のもと、副会長をつとめた。昭和四十八年永

する用意(「楨有恒氏」)、「日本アルプス大観」(河野齡蔵氏)など、われわれ山岳会員の見がせない文がある。また「東京から見える山」(木暮理太郎氏)は、『山の憶ひ出』に載っていない分まで入っている、八ページにわたって展開し、圧巻である。全巻どのペー

ジにも、荒廃されないころの日本を見ることが出来る。

私がこの本を見つけたのは、山岳会の事務所が神田の向井ビルにあったころで、そこへ行く途中の古書展(売価五百円)であった。

川崎精雄
(以下次号)

年会員となり、昭和五十三年十二月には名誉会員に推挙されている。本会のマナスル登山隊派遣に際しては、当初より、常務理事、ヒマラヤ委員会委員として、裏方をとつとめ、昭和三十年五月には、サマ問題解決のため、西堀氏とともに特使としてカトマンズに派遣され、マヘンドラ国王にも謁見し大役を果たしている。昭和四十八年夏には、スイスに遊び六十八歳の高令でメンヒに登る。

晩年はもっぱら、南会津や東北のひと気のない山や峠を歩かれていたが、本会創立年に生れた同氏は、八十周年の行事を楽しみにしておられた。著書に「山・よき仲間」(昭和三十七年刊)があるほか、「山岳」や会報「山」への寄稿も多かった。

葬儀は三月二十三日、午前十一時三十分より、藤沢市辻堂神台一ノ二ノ十一、湘南斎場においてとり行われたが、大賀道典、本郷常幸、赤星兵馬氏ら、古くから親交のあった友人のほか、本会からは生花を供えるとともに、田口副会

長、織内、望月、小原、太田、辰沼、今村、山本(朋)、千谷、金坂、大塚、広羽、山崎(安)、神崎、松田、山崎直、東原、藤井(正)など会員多数が参列した。ほかに立見辰雄氏ら成蹊踏高会関係者、油谷次康氏ら南会津山の会関係者らも多数参列し、故人の冥福を祈った。

ここに深甚なる哀悼の意を表する次第です。
(松田雄一)

渡辺 漸氏

(会員番号九四八)

渡辺漸さんが、四月二日、築地ガンセンターで長逝された。享年八十歳。晩年ガンセンターの病理部長だったが、その前、長く広島医大で原爆白血症研究に力を注ぎ日本血液学会の会長もされた。戦後、東京を離れたので最古参の会員であるが日本山岳会とも疎遠になった。戦前の岳人で漸さんの名を知らぬ人はいなかった。大正末期の三高時代、今西、西堀さん等と雪の黒部源流で露営をしたり、剣岳源次郎尾根の初登。大正十四年本会に入会(九四八番、昭和五

十一年復活)、東京に移ってから冠氏と鹿島槍東尾根の初登。冠、岩永両氏と黒部峡谷に新ルートを開く等、多くの足跡を残した。昭和十年暮、東大現役の千島遠征の隊長を務めた。昭和四年東大卒後、藤島、松方氏等の推せんで理

事就任。冠氏と並び山岳を編集、新鮮な風を吹きこんだ。

会が精力的に学校OBを吸収した時代で、勉強家で毒舌にしてユーモラスな人柄は当時の会にうってつけだった。医学関係供花に埋れた葬儀につつましく並んだ日本山岳会、ACK、東大山の会の三本の花は過ぎし日の漸さんの山の世界をしるのばせた。

(田口二郎 85・4・10)

今井雄二氏

(会員番号三〇四二)

かねてご入院中だった今井雄二氏は、厳しい今年の寒さのためか肺炎を起され、三月十五日喜美子夫人の手厚い看病の甲斐もなく、八十六歳の生涯を終られた。

思えば数年前、厳道峠をご夫妻と一緒に越えたのが最後の山行となった。そしてその夜は道志の湯にくつろいだり、私たちの山旅にはいつも山の湯の安らぎがあった。

雄二氏と気の合った山下一夫氏が先に亡くなられてからは、何となく淋しげで単独行のほかに、いつも喜美子夫人と私の山行が多かった。この四人の山仲間、山行は各地の秘境を探る情緒豊かな山歩きで、二十数年間、続けられた。

今井雄二氏はおだやかなロマン

チストで、いつも静かに冥想にふけりながら歩く余裕型で、私の性格と何かにつけて共通点があった。

穂高の岩登りや蓼科生活のあと、喜美子夫人と同行以外、あまり皆さんと一緒に歩かれなかった。

今まで山へ一緒した数においては、他の誰よりも私は雄二氏と行を多くした一人かも知れない。「心に山ありて」のアルプの詩はもう聞けないが、ふたたび厳道峠を訪れ故人の冥福を祈りたい思

那須 皓氏

(坂倉登喜子)

本会の古い会員(明治四十一年十二月入会・会員番号一七七)であった。元駐インド、ネパール大使、那須皓氏は三月二十九日午前九時五十七分、心不全のため、赤坂の心臓血管研究所付属病院で逝去されました。享年九十五歳。

同氏は駐ネパール大使在任中(昭和三十一年三月十六年)、当会のヒマルチュリ登山隊などが大変お世話になりました。

葬儀は四月十日午後一時から青山斎場で行われましたが、本会からは元理事の春田俊郎氏等が参列しました。ここに深甚なる哀悼の意を表する次第です。
(松田雄一)

新刊 山の 紹介

立山の平蔵三代

寺林 峻著

正月、芦峠の佐伯平蔵さんからいただいた年賀状には「平蔵の山を語れと申されますのか……」という寺林峻著「立山の平蔵三代」の一節があった。

本書は二代目・佐伯平蔵が、名ガイドといわれた父親（初代平蔵）、危険にも臆しな強い気性の持ち主であった祖父（平左衛門）、の思い出やエピソード、父親に連れられて登った初登山からガイドとして生きてきた六十年の山の生活など、三代にわたる立山のかかわりあい、語り口調の文章で綴ってあり、読みやすく、かつ内容も読む人を魅きつける。立山ガイドといえは明治末期から大正時代にかけて、わが国近代登山史の裏方として大きな役割を

を果たした。立山は古くから信仰登山の山としてにぎわったが、当時、登山基地ともいえる芦峠寺には「仲語」と呼ばれる村人たちが大勢いた。

日ごろはわずかな田畑を耕やし、狩猟や木こり、炭焼きなどで生活のかてを求め、夏の登山シーズンを迎えると、全国からの登山者を山へ案内し、登山の途中に立山開山の縁起や伝説を語り、また食事の世話などもした。

第一章の「帯ほどの平左衛門」は、仲語であり、猟師でもあった祖父の思い出。カモシカを絶壁に追いつめ、着物の帯をほどいて立ち木にしぼりつけ、もう一方を自分の腰に結んで猛然とカモシカに立ち向かっていった豪胆な平左衛門と幼かったころからのふれあいが語られている。

明治四十年代になると立山には信仰登山者のほかに、趣味による登山者もふえ、仲語も近代アルピニズムによる新しい時代の山岳ガイドへと生まれ変わった。

剣岳に「平蔵谷」の名を残した父親は、「長次郎谷」の宇治長次郎とともに山案内人たちの中心として活躍、登山者の信頼を得て近代登山の発展に貢献するとともに、立山ガイドの評価を高めた。

第三章「贈られた谷」は激しい気性ながら、素朴で物事にこだわらない平蔵と、温厚な人柄だった長次郎との友情をえがく。二人は

ともに酒好きで、平蔵の家で夜遅くまで飲みながらガイドの相談をするなど、よきライバルであり、親友でもあった。芦峠の秋祭りに露店を出して、アメや駄菓子を買っていった長次郎の店のまわりで、徹底した甘いものの嫌いの平蔵が菓子をたべながら「こりゃ、うまいぞ」と知人らにすすめていたことがあった。これは友情というより「山の好敵手に対する快気」であり、長次郎はまた自分がはじめて通過した谷に平蔵の名前をつけた（？）がこれはそのお返しだったのか（？）。こうした二人の間柄はいつもの傍にいた息子しか知らないかわれたエピソードであろう。

第七章「真砂沢の夏」は二代目平蔵が長いガイド生活の中で最も記憶に残る昭和十一年夏、早大山岳部との合宿生活の話。当時の大雪山山岳部が各校とも気力に満ち、充実した登山を行っていたことがうかがえる。

本書は「岳人」（昭和五十八年一月・五月）に連載された内容を加筆、新たな書き下ろしを加え、松尾峰、剣沢小屋など有名な遭難事件、立山ガイドの幾多の悲劇、ガイド仲間のことなど十章からなっている。

昭和五十八年七月五日 東京新聞出版局発行 二三四ページ 定価千二百円

(井上 晃)



東・西
南・北

福島支部より

福島支部の新年会は、旧正月中にやることにほぼ定着している。

今年も二月十日、午後六時から、福島市内エビスグランドホテルにおいて開かれた。この日は福島市名物の信夫三山晩参りの大わらじが、信夫山の頂きにある羽黒神社に奉納される晩である。

まず、中島支部長が近況報告をし、挨拶の中で、四月二十一日、二十二日、新野地温泉、安達太良山で実施を予定されている東北ブロック親善山行「JAC東北ブロック八四集会」の計画を披露し、参加を呼びかけた。

つづいて高野氏の音頭で乾杯、なごやかに杯を傾けながら自己紹介。身元調査や半畳が入って賑やかなこと。また、郡山と福島にスキーと山の用品店を営む会員の水上君は、山スキーとバックケンの新製品を紹介、研究熱心なところをみせたりで、和やかな新年会であった。

出席者 中島正夫、渡辺千代蔵、古市義孝、高野喜七、佐藤 光、

二階堂匡一郎、佐久間高男、古内克己、清和良晴、山倉洋一、水上雅、鈴木 嘉、斎藤義晴、伊藤義男、阿部明義、松井忠治、大友繁、河上鏡治、後藤泰治、相模八郎、八巻和男、安藤 治、以上十二名 (安藤 治)

オリエンテーション

に参加して

加治川栄二

三月二十四日にルームで行われたオリエンテーションは、午後二時過ぎから、たっぷり二時間かけて、佐々会長さんをはじめ、各委員会の担当理事の方からJACの歴史、組織、性格、運営面、活動状況など多岐にわたって、懇切な説明と紹介をうかがった。引続き、アルコール付きの懇談会に移り、各自、自己紹介も終って舌も滑らかになったところで、新入会員から先輩方への活発な質疑や抱負の表明なども出て、なごやかな楽しい雰囲気の中で予定時間を超過し、六時少し前に散会となった。

この日の出席者は、男女あわせて三十四名、年代も二十代から八十代まで多彩、遠く福島、越後、信濃各支部所属の方も参加されたが、私のみるところ、恐らく参加者の全員が、JACに対する認識を新たにし、クラブの新メンバーとしての心温まる思いと有益な集

岳人事典

岳人編集部編

徳久球雄、塚本圭一、湯浅道男、雁部貞夫（いずれも本会々員）の四氏を編集委員として、三年越しで完成した山の事典である。登山者人名を国内、国外にわけて、日本人名四六七名、外国人名五二四人が載っている。一般の人名事典には載っていないものだけに、いろいろな面からきわめて参考にする点が多い。

概説として登山と地図、登山と地形、地質・岩石、高層気象とその天気図、雪氷、雪崩、森林、山と動物、山の鳥、山と昆虫など二十五項目にわたりそれぞれの専門家による説明が巻頭に載せられ、ほかに技術・用具用語、一般用語の解説、資料篇として日本山名表、外国山名表、日本登山史年表抄、山城別概略図、外国人名索引がある。

私も日本人の名を大分担当したが、ちょうど京都の同朋舎の「日本登山記録大成」の仕事とち合い充分なものが書けなかった。また日本登山史年表も、地域別にしたが、これも私の手がまわらず、書き足りないところが多かったことを反省している。しかし山と溪谷社の「世界山岳百科事典」が出たのがすでに十二年前のこと、ここに新しく人名を主体とし

た岳人事典が発行されたことは各方面に歓迎されたいと思うし、編集者の労を多としたい。

昭和五十八年七月十五日 東京
新聞出版局発行 四六一ページ
定価五千元

（山崎安治）

世界

人工衛星写真集

NASA 著

竹内 均訳

地球は裸にされている。そういった感慨を抱かされる写真集である。

アメリカの打ち上げた人工衛星から、ロシアの大平原で立小便をしている農夫の姿が写真に撮られ、またその周辺の農地も写し出され、農作物の出来具合が完全に掌握される、というようなことを書いた小説を読んだ記憶があるが、この写真集を見ると、そういういたことがあつた程度うなずける。

縮尺はそんなに大きなものではないが、例えば「世界の屋根」のページでは、ネパールの山々がその山巒まで写し出されており、これを拡大すれば、未踏の谷筋までが明確になるだろう。

一方、「南西新疆地区」のページには崑崙西部の写真があり、これも拡大すれば、まだ私たちの手に入らない、このあたりの山岳地帯の詳細な地図ができ上るのでは

ないか。

特に興味があつたのは、「中国の大きな耳」と題されたロプ・ノール湖およびその周辺の写真である。リヒトホルフェンやブルジェワルスキーの時代に、このようなランドサットからの写真があれば、もちろんロプ・ノール論争もなかったろうし、などと思つたりしていると、何だか急にこのように地球が裸にされることに抵抗を覚えたりする。

それにしても、ほとんど地球の表面の大部分が、探検家や地理学者たちによって解き明かされたあとで、このような克明な写真がランドサットから撮られるようになって、非常によかつたと思う。もっと早い時期に、こんなに地球の表面が裸にされていた、われらが尊敬する探検家たちもこの世に存在しなかつただろう。

全部で四一二葉の地球のいろいろな地域の局部写真が載せられているが、虫めがねを片手にして眺めていると、時間のたつのも忘れてしまふ。

写真集の最後には、ランドサット・システムの簡単な説明もつけ加えられている。

一九八二年 朝倉書店刊

（田村俊介）

わが出逢いの山々

筑木 力著

会務報告

四月理事会

四月九日 午後六時三十分

本会ルーム

議事内容

◎昭和五十八年度事業報告、収支決算報告 承認

◎会計監査報告 収支決算 了承

◎八十周年記念事業について

①山田委員長が三月理事会で承認された事業計画概要等を、資料に基き説明。各分科会委員長が計画内容を説明。

②西武での展覧会は来秋に変更
③松本市商工会議所より来秋の

りだったという一種の感銘をもち夫々は帰宅されたことと思う。私個人としても、日本山岳会など、自分の山行経歴からすれば、たいそれたところというものが、入会前の偽らざる気持だった。知人に勧められて昨年入会許可を頂戴し、今日まで既に半年余、三水会などの会合にも参加させて貰い、少しずつイメージチェンジしつつはあつても、本質的には恐らく近寄り難いベテランの集団ではなからうか、という偏見に似た思いは必ずしもふきかれた訳ではなかった。しかし、今回のオリエンテーションにおける諸先輩の色々なお話から、JACの性格、在り方がよく理解できた。同時に、幅広い

層の会員が、それぞれに山を媒体として種々な楽しみかたをしておられることもわかつた。また、いわゆるベテランであればこそ、なおいっそう謙虚になるものであることも十分に頷けるものだった。もう一つは、しごく当然のことながら、自らが積極的にクラブの色々な集會や催しに参加してゆくことが、より良いクラブライフをエンジョイする道であり、これが新参の会員として最も大切なことだということも実感としてわかつたつもりである。

何となく、展望の開けたようなハレバレとした感じの一日だった。

山岳博覧会の企画と、JACの協力要請について話があら、西武との調整等、今後、検討することになった。

◎カンチエンジュンガ登山隊の近況
四月十五日以降、ABCより行動。四月二十二日、NTVが

◎青年会制度の新設について
青懇、学生部指導委の意見も聞くようにとの話もあるも、総会議案の一つとして「学生・青年会員制度の新設について」を提案することに決定。

◎委員会報告
上高地山研の開所は雪が多く

新潟県の北西部は日本海の荒波に洗われ、ほかの三面は県境の高山脈に囲まれている。著者は静岡県三島市の生れ、新潟県中央部にある県立村松高校の教頭で、本会の越後支部員でもある。またほか「山とともに」の著書もある。本書では「研究と随想」や「紀行」の目次があるところに同種のものまでまとめられておらず、例えば「県内外の二十の名山」の印象と想い出などはもう少し手を加えて「紀行」に入れるのが当然と考えるのだが、この点が混乱しているように惜しいと思った。

北穂高から奥穂高へ行く途中で単独行者に同行をたのまれた。一人は著者たちのペースに合わず落後したが、もう一人の方は三時間著者たちのあとに従っていたが、やがて離れた。どこの誰かもわからないし、登山歴も能力も知らない人から同行を乞われるのは迷惑だ。最悪のときは遭難に結びつくことすらあると著者はつづるのだが、改めて考え直してみると、もっと明瞭に断わればよかったと反省している。

主題をなしている「紀行」には著者の朝から晩までの登山行動が書かれてはいるが、山の感想、観察、批判などはなく、もっぱら行き逢う登山者の説明といったことで終始し、山小屋、泊り場、水場についての知識は得るが、地形、岩石、植物、動物、昆虫について

の記述はみられない。

これら自然科学についての知識が加味されることで、著者の紀行文は深みを増していくものと思われる。今後を期待したい。

昭和五十八年十一月十五日
ほおずき書籍発行 A5版 三
二二ページ 定価二千五百円
(藤島 玄)

立教大学山岳部

部報第10号

立大山岳部、山友会編

立大山岳部の部報が戦後初めて発行された。第9号の発行が昭和十六年十月二十五日だから実に四十二年振りのことで、編集に当たった片桐氏らの努力は大変なものであったろうと想像する。聞くところによると、立大山岳部の先輩たちの中には、10号としないで別の形で出版せよと圧力をかけた人もいたそうだが、それを押し切り、部報10号として発刊されたことは喜びにたえない。

主な内容は小史、随想紀行ほか、海外登山報告、合宿報告、年報、追悼、鹿島槍ヶ岳報告となっている。

小史は昭和十六年から五十八年までを五期にわけ、それぞれの時代の責任者が部の主要な動向を伝えており、海外登山報告では一九六四年のバルン氷河の山々、一九六五年南米コルケクルス峰、一九

六六年エルブルース峰、一九六八年漢攀山、雪岳山、北漢山、一九六九年ヒンズークシユ・デイルゴル谷周辺、一九七三年カンパチェン峰と七つの海外登山の報告とともに、OBの参加したマナスル、ヒマルチュリ、サルパチョメなどの概要も付されている。主な合宿報告は昭和十七年冬の北鎌尾根から槍ヶ岳をはじめ、昭和五十三年春の槍ヶ岳・立山スキー縦走までの十四の主要な北アルプスを中心とする登山行動をまとめてある。年報欄は四十年以上にわたるだけに本書の半分以上を占める長大なものとなっている。

四十年の空白を埋め、伝統ある立教大学山岳部の行動が、本書によって克明に伝えられている。昭和十七年の夏の穂高湖沢で、私は早稲田の山岳部員として夏山合宿をおこなったのだが、そのとき、立大の合宿とも一緒にになり、一夜、交歓コンパをやったことがあるが、立教の人たちが「卯の花におう」の二部合唱を見事に歌ってわれわれを圧倒したことを、いま、この部報を見てなつかしく思い出した。その時のリーダー横河氏が戦没されていたことを、この部報は知らせてくれた。

昭和五十八年十一月二十九日
立教大学体育会山岳部発行 五
一二ページ 写真多数 頒価五
千円。
(山崎安治)

て遅れる。

●会務報告

①三月評議員会は五十九年度事業計画・予算案を承認、また評議員の欠員補充を理事会で検討するよう話しあう。

②成瀬岩雄会員の未亡人より寄付、蔵書寄贈の申入れあり。

③京大・同志社大合同登山隊後援会メンバーに、本会会長参加の依頼あり

④JAC植村直己の会には五十万円集まった。

⑤会報遅れの件は担当理事多忙のため編集者を交代する。理事交代もありうるので評議員会の了承も得ること。

⑥総会は五月十八日に開催する以上

・ルーム誌

3月

2日(金) 常務理事会、科学委
5日(月) 理事会
6日(火) 婦懇ゼミナー、図書委
7日(水) 集會委
10日(土) 山岳史懇談会
12日(月) 拡大理事会、総務委
13日(火) 婦人懇談会
14日(水) 集會委
15日(木) 海外委講演会
16日(金) 集會委
21日(水) 三水会、総務、集會合同委

22日(木)

評議員会

23日(金)

山研委員会

24日(土)

オリエンテーション

25日(日)

80周年実行委員会

26日(月)

委員会連絡会、婦懇講習会、総務委、書評委

27日(火)

自然保護委講演会

28日(水)

科学委

29日(木)

フィルム委員会

今月の来室者 456名

退会

8485

8820

6759

7058

8385

2454

長谷川 三千子

古沢 達男

坂本 幹

小杉 伸一

渡辺 芳夫

佐伯 富男

須賀 太郎

下平 研一

7248

5061

林 欣子

5979

鳥見 迅彦

7704

大日本スクリーン山岳部

7938

五十嵐 正

8392

瀬川 栄一

3042

今井 雄二(59.3.15)

865

成瀬 岩雄(59.3.21)

改姓

8383

市村 洋子→前田へ

9249

伊藤 美恵子→松井へ

8383

夫婦会員へ

8432

前田 洋子

8432

前田 文彦

ネパール・ヒマラヤ登山許可峰

A ネパールの遠征隊、または少なくとも3名のネパール人のメンバーを含む、ネパールと外国の合同遠征隊に開放されている山峰

	山 名	高度(m)	地 域	行 政 区 画	緯 度	経 度
1.	Bhrikuti	6,364	Damodar	Dhaulagiri	28 53 37	84 13 04
2.	Big White Peak (Loenpo Gang)	6,979	Jugal	Bagmati	28 11 45	85 48 00
3.	Chamar	7,187	Serang	Gandaki	28 33 19	84 56 43
4.	Changla	6,563	Changla	Karnali	30 18 11	82 07 44
5.	Dorje Lakpa	6,966	Jugal	Bagmati	28 10 26	85 46 45
6.	Gurja Himal	7,193	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 40 26	83 16 37
7.	Gyachung Kang	7,952	Khumbu	Sagarmatha	28 05 53	86 44 32
8.	Gyalzen Peak	6,151	Jugal	Bagmati	28 11 00	85 50 17
9.	Jongsang Peak	7,483	Janak	Mechi	27 52 52	88 08 08
10.	Karyolung	6,511	Rolwaling	Sagarmatha	27 43 55	86 36 55
11.	Lantang Ri	7,205	Langtang	Bagmati	28 22 55	85 41 01
12.	Madiya Peak	6,256	Jugal	"	28 11 30	85 49 10
13.	Nala Kankar	6,062	Nalakankar	Karnali	30 21 27	81 23 58
14.	Nepal Peak	6,910	Kanchenjunga (1)	Mechi	27 46 37	88 10 30
15.	Ohmi Kangri	6,829	Janak	"	27 53 52	87 57 51
16.	Phurbi Chyachu	6,637	Jugal	Bagmati	28 07 50	85 52 10
17.	Tent Peak	7,365	Kanchenjunga (1)	Mechi	27 47 10	88 11 55

B ネパールと外国の合同遠征隊として登山する場合に限り、外国の遠征隊に開放されている山峰

1.	Bobaye	6,808	Gurans/Yoko	Mahakali	29 57 33	81 01 21
2.	Chamlang	7,319	Mahalangur/Barun	Sagarmatha	27 46 30	86 58 57
3.	Cheo Himal	6,820	Peri	Gandaki	28 45 52	84 27 06
4.	Cho Oyu	8,201	Khumbu	Sagarmatha	28 05 37	86 39 43
5.	Ganesh I (Yangra)	7,429	Ganesh	Bagmati	28 23 30	85 07 38
6.	Himlung Himal	7,126	Peri	Gandaki	28 46 19	84 25 19
7.	Jethi Bahurani	6,850	Gurans	Mahakali	29 52 56	81 02 37
8.	Kanchenjunga Central	8,482	Kanchenjunga	Mechi	27 42 05	88 09 20
9.	" South	8,476	"	"	27 41 31	88 09 25
10.	Roc Noir	7,485	Annapurna	Gandaki	28 36 50	83 52 29
11.	Shartse	7,459	Khumbu	Sagarmatha	27 57 56	86 59 00

C 外国の遠征隊に開放されている山峰

1.	Ama Dablam	6,812	Barun	Sagarmatha	27 51 42	86 51 50
2.	Annapurna I	8,091	Annapurna	Gandaki	28 35 45	83 49 20
3.	" II	7,937	"	"	28 32 05	84 07 30
4.	" III	7,555	"	"	28 35 01	83 59 31
5.	" IV	7,525	"	"	28 32 14	84 05 02
6.	Annapurna South	7,219	"	"	28 31 04	83 48 30
7.	Api	7,132	Gurans	Mahakali	30 00 15	80 56 00
8.	Barun Tse	7,129	Barun	Koshi	27 52 19	86 58 55
9.	Baudha	6,672	Mansiri	Gandaki	28 22 43	84 40 38
10.	Chobuje	6,685	Rolwaling	Janakpur	27 52 50	86 29 33
11.	Cholatse	6,440	Khumbu	Sagarmatha	27 53 06	86 46 18

12.	Cho Polu	6,711	Mahalangur	Sagarmatha	27 55 09	86 58 55
13.	Churen Himal (2)	7,371	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 43 55	83 12 45
14.	Dhamps	6,012	Mukut	"	28 47 49	83 36 57
15.	Dhaulagiri I	8,167	Dhaulagiri	"	28 41 46	83 29 43
16.	" II	7,751	"	"	28 45 46	83 23 22
17.	" III	7,715	"	"	28 45 16	83 22 46
18.	" IV	7,661	"	"	28 44 10	83 18 55
19.	" V	7,618	"	"	28 44 04	83 21 56
20.	" VI	7,268	"	"	28 42 30	83 16 32
21.	Sagarmatha (3)	8,848	Khumbu	Sagarmatha	27 59 17	86 55 31
22.	Fang	7,647	Annapurna	Dhaulagiri	28 34 41	83 48 12
23.	Ganesh II	7,111	Ganesh	Bagmati	28 22 45	85 03 32
24.	" III (Salasungu)	7,110	"	"	28 20 07	85 07 19
25.	" IV (Pabil)	7,052	"	"	28 22 17	85 03 43
26.	" V	6,986	"	"	28 19 53	85 09 49
27.	Gangapurna	7,455	Annapurna	Gandaki	28 36 18	83 57 00
28.	Glacier Dome	7,193	"	"	28 36 25	83 53 28
29.	Gauri Shankar	7,134	Rolwaling	Janakpur	27 57 57	86 20 07
30.	Hanging Glacier Peak	6,553	Kanjiroba	Karnali	29 19 36	82 44 13
31.	Himalchuli East	7,893	Mansiri	Gandaki	28 26 08	84 38 32
32.	" North	7,371	"	"	28 26 59	84 36 23
33.	" West	7,540	"	"	28 26 07	84 37 07
34.	Hongde	6,556	Mukut	Karnali	28 50 34	83 29 57
35.	Jagdula Peak	5,764	Jagdula	"	29 19 30	82 35 30
36.	Jannu	7,710	Kanchenjunga	Mechi	27 40 58	88 02 45
	(Kumbakarna)					
37.	Junction Peak	6,139	Kanjiroba	Karnali	29 17 13	82 47 47
38.	Kangbachen	7,903	Kanchenjunga	Mechi	27 43 00	88 06 48
39.	Kagmara I	5,960	Kanjiroba	Karnali	29 08 20	82 45 40
40.	Kande Hiunchuli	6,627	Patrasi	"	29 24 40	82 33 37
41.	Kanchenjunga	8,586	Kanchenjunga	Mechi	27 42 09	88 09 01
	(Main Peak)					
42.	Kang Guru	6,981	Peri	Gandaki	28 39 27	84 18 05
43.	Kangtega (Khantega)	6,779	Barun	Sagarmatha	28 47 32	86 49 07
44.	Kanjeralwa	6,612	Kanjiroba	Karnali	28 14 00	82 52 35
45.	Kanjiroba (Main Peak)	6,883	"	"	29 22 33	82 38 25
46.	Khatang	6,782	Rolwaling	Janakpur	27 45 25	86 35 50
47.	Lamjung Himal	6,983	Annapurna	Gandaki	28 29 22	84 11 30
48.	Langsisa Ri	6,427	Jugal	Bagmati	28 13 01	85 42 49
49.	Langtang Lirung	7,234	Langtang	"	28 15 22	85 31 10
50.	Lhotse	8,516	Khumbu	Sagarmatha	27 57 45	86 56 03
51.	Lhotse Shar	8,400	"	"	27 57 30	86 56 35
52.	Lobuje West	6,145	"	"	27 58 20	86 46 45
53.	Makalu I	8,463	Mahalangur	Koshi	27 53 23	87 05 20
54.	" II	7,678	"	"	27 54 57	87 04 44
	(Kangchungtse) (4)					
55.	Manapathi	6,380	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 38 44	83 27 30
56.	Manaslu	8,163	Mansiri	Gandaki	28 32 58	84 33 43
57.	" North Peak	7,157	"	"	28 36 14	84 32 40
58.	Nampa	6,755	Gurans	Mahakali	30 00 30	81 00 00
59.	Ngojumba Kang	7,743	Khumbu	Sagarmatha	28 06 22	86 42 22
60.	Nilgiri Central	6,940	Nilgiri	Dhaulagiri	28 40 45	83 44 19
61.	" North	7,061	"	"	28 41 21	83 44 48

62.	Nilgiri South	6,839	Nilgiri	Dhaulagiri	28 39 15	83 43 58
63.	Numbur	6,957	Rolwaling	Sagarmatha	27 45 15	86 34 28
64.	Nuptse	7,855	Khumbu	"	27 58 02	86 53 14
65.	Patrasi	6,450	Patrasi	Karnali	29 25 22	82 35 15
66.	Peak 29 (Dakura)	7,871	Mansiri	Gandaki	28 00 13	84 34 09
67.	Pumori	7,161	Khumbu	Sagarmatha	28 00 53	86 49 41
68.	Putha Hiunchuli	7,246	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 44 56	83 08 55
69.	Saipal	7,031	Gurans/Saipal	Mahakali	29 53 14	81 29 43
70.	Sisne	5,849	Sisne	Karnali	29 47 00	82 20 30
71.	Sita Chuchura	6,611	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 47 00	83 29 07
72.	Tawoche	6,501	Khumbu	Sagarmatha	27 53 28	86 46 48
73.	Thamserku	6,623	Barun	"	27 47 25	86 47 15
74.	Tilicho Peak	7,134	Annapurna	Gandaki	28 40 58	83 48 50
75.	Tukuche Peak (5)	6,920	Dhaulagiri	Dhaulagiri	28 44 46	83 33 43
76.	Yalung Kang	8,505	Kanchenjunga	Mechi	27 45 15	88 08 25

D ネパール登山協会の許可するトレッキング・グループに開放されている山峰

1.	Island Peak	6,160	Khumbu	Sagarmatha	27 55 15	86 56 14
2.	Paldor Peak	5,896	Ganesh	Bagmati	28 16 43	85 11 02
3.	Tent Peak	5,663	Annapurna	Gandaki	28 33 30	83 53 40
4.	Hiunchuli	6,441	"	"	28 30 39	83 51 03
5.	Fluted Peak	6,501	"	"	28 35 15	83 53 06
6.	Ramdung	5,925	Rolwaling	Janakpur	27 49 03 (6)	86 32 00
7.	Parchemuche	6,187	"	"	27 49 40	86 32 45
8.	Mera Peak	6,654	Khumbu	Sagarmatha	27 46 27	86 54 40
9.	Khongma Tse (Mehra)	5,849	"	"	27 56 37	86 50 30
10.	Kusum Kanguru	6,367	"	"	27 43 50	86 47 28
11.	Kangja Chuli	5,844	Lantang	Bagmati	28 09 00	85 35 50
12.	Pokalde	5,806	Khumbu	Sagarmatha	27 56 15	86 50 10
13.	Mardi Himal	5,587	Annapurna	Gandaki	28 28 20	83 55 58
14.	Lobuje	6,119	Khumbu	Sagarmatha	27 58 08	86 47 05
15.	Kwangde (Kawande)	6,011	Rolwaling	"	27 48 01	86 38 02
16.	Pisang	6,091	Damodar	Gandaki	28 38 57	84 11 25
17.	Chulu West	6,419	"	"	28 44 36	84 01 32
18.	" East	6,584	"	"	28 44 09	84 02 10

本表は、昨年8月26日ネパール政府が発表した‘List of mountaineering and trekking peaks’を、一部邦訳したものは、ほぼ原文どおりに紹介したものである。これは、ネパール・ヒマラヤの122峰について、外国人に登山を許可する際の4種の区別を示した表であるが、この中の72峰の高度が修正されていること、緯度・経度の変更、および山名をネパール名に変更、または山名にネパール名を注記するなど、積極的な現地名の採用が目される。

8,000 m以上の12峰についても、9峰の標高が次のように修正され、その他のヒマラヤ高度番付もかなり変った。

Kanchenjunga (Main Peak)

8598 -12 → 8586

Lhotse 8511 +5 → 8516

Kanchenjunga (Central)

8496 -14 → 8482

Kanchenjunga (South) 8490 -14 → 8476

Makalu 1 8481 -18 → 8463

Yalung Kang 8420 +85 → 8505

Lhotse Shar 8383 +17 → 8400

Manaslu 8156 +7 → 8163

Cho Oyu 8153 +48 → 8201

山名については、エベレストをサガルマータ (Sagarmatha) とし、中国名のチョモランマに加えてネパール名も登場して、三様の呼称が揃ったことになる。

なお、今回のヒマラヤ高度変更については、最近発表された、薬師義美「ネパール・ヒマラヤの地図と標高」(『岩と雪』100号、昭和59年2月)が参考文献として有益である。

(注) (1) 原文 Kangchenjunga. 表中の他、7例に従い、gをとる。(2) Himal を補う。(3) 原文 Saharmatha, hをgに改める。(4) 原文 Kangchhungtse, cをとる。(5) 原文 Tikuche Peak, iをuに改める。(6) 原文 86 62 00, 62を32に改める。

その他の緯度・高度についても、不鮮明な箇所が多く、他の資料によって補ったところがある。(菅川)

図書受入報告

図書委員会

昭和58年8月分受入図書

1. 尾崎隆著「果てしなき山行」中央公論社 1983 (版元寄贈)
2. 沼田真編「東ネパール・タムール流域の生態学的調査とマカルーII峰の登山—1977年千葉大学」千葉大学ヒマラヤ委員会 1983 (版元寄贈)
3. 沼田真編「東ネパール・アルン谷の生態学的調査とバルンシェの登山—1981年千葉大学」千葉大学ヒマラヤ委員会 1983 (版元寄贈)
4. 五来重編「山岳宗教史研究叢書 17 修験道史料集1 東日本」名著出版 1983 (購入)
5. 山田秀三著「山田秀三著作集 アイヌ語地名の研究2」草風館 1983 (購入)
6. 山田秀三著「山田秀三著作集 アイヌ語地名の研究4」草風館 1983 (購入)
7. 柳田国男校「日本紀行文集成 第1巻」日本図書センター 1979 (購入)
8. 大橋乙羽校「日本紀行文集成 第2巻」日本図書センター 1979 (購入)
9. 岸上質軒校「日本紀行文集成 第3巻」日本図書センター 1979 (購入)
10. 岸上質軒校「日本紀行文集成 第4巻」日本図書センター 1979 (購入)
11. エドワード・バイアット著 山崎安治・岡沢祐吉訳「ギネスワールド 山と登山」講談社 1983 (版元寄贈)
12. 谷有二著「富士山はなぜフジサンか 私の日本山名探検」山と溪谷社 1983 (版元寄贈)

13. 徳久球雄・塚本瑠一・湯浅道男・雁部貞夫編「岳人事典」東京新聞出版局 1983 (版元寄贈)
14. 小西政雄著「砂漠と氷雪の彼方に チョゴリ登山の全記録」山と溪谷社 1983 (版元寄贈)
15. Ray Atkeson・David Muench "California" Belding 1970 (佐々保雄氏寄贈)
16. Makoto Numata "Structure and dynamics of Vegetation in Eastern Nepal" Chiba Univ. 1983 (千葉大学ヒマラヤ委員会寄贈)

9月分受入図書

17. 羽賀正太郎他編「日本の名山3 尾瀬・日光と南会津の名山」ぎょうせい 1983 (版元寄贈)
18. 野口冬人著「山通いの日々 青春を歩いた山々」刊々堂出版社 1983 (著者寄贈)
19. 日本ハイキング倶楽部編「東京から見える山 276」日本ハイキング倶楽部 1983 (版元寄贈)
20. 岩橋崇至著「北ぐにの山々 カムイの詩がきこえる」日刊きつき研究社 柳の葉書房(発売) 1983 (発売元寄贈)
21. 羽賀正太郎他編「日本の名山2 飯豊・朝日と東北の名山」ぎょうせい 1983 (版元寄贈)
22. NASA著・竹内均訳「世界人工衛星写真集」朝倉書店 1982 (購入)

10月分受入図書

1. 斉藤清吉著「鳥海山登山 山男のひとりごと」本の会 1983 (斉藤清吉氏寄贈)
2. 深野稔生著「神室岳 その山容と登山史覚え書」日伸書房 1983 (版元寄贈)
3. 塚本瑠一著「新山の昆虫記」山と溪谷社 1983 (版元寄贈)
4. 勝縁荘開設 50 年記念刊行会編「大菩薩峠の国炉裏」けやき出版 1983 (益田操氏寄贈)
5. 山田亀太郎・山田ハルエ述 志村俊司編「山と猟師と焼畑の谷—秋山郷に生きた猟師の詩—」白日社 1983 (版元寄贈)
6. 森林文化協会編「緑の明日へ—「朝日の森」の理念」森林文化協会 1983 (版元寄贈)
7. 登歩溪流会編「登れ、より高く」登歩溪流会 1981 (版元寄贈)
8. 北海学園大学附属図書館 北海学園大学山小屋管理委員会共編「北海学園大学山小屋文庫目録」1983 編者発行 (版元寄贈)

(以下次号)

(編集後記) 一、二年前までは四ポイントの活字もはつきり見えたのですが、このところ眼鏡がないと「カンチエング」が「カンチエング」であつても分からなくなりました。校正ミスも増えるのではないかと怖れます。若い力のサポートを！ (〇)

昭和五十九年五月二十日発行
100 東京都千代田区四番町五十四
サンビュウハイム四番町
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 岡 沢 祐 吉
電話東京(03) 四四三三
振替口座東京三一四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂